



# 第4回 轟泉水道の大改修

(こうせんすいどう)

現在、全国的な注目を集めている馬門石。  
宇土を舞台にした日本古代史上の謎に皆さんも挑んでみませんか。



宇土の宝「轟水源」

皆さんは「現存する日本最古の上水道」が宇土市にあることをご存知ですか？

その名は「轟泉水道」。

江戸時代、宇土の城下の飲み水は水質が非常に悪く、街の人々は毎日の飲み水に大変困っていました。そこで、当時の藩

主細川家宇土支藩2代藩主・細川

## 大王のひびきを運ぶ実験航海

00年が経過した頃、老朽化による水漏れが目立つようになってきました。事態を憂慮した宇土支藩6代藩主・細川興文公は、焼き物より頑丈な馬門石製の水道管に総替えることを決断しました。実はこの興文公、大の馬門石好き。例えば、隠居所の蕉夢庵（宇城市）の台所流しに



轟泉水道の取水口（轟水源）

行孝公は、街の南西部にある清らかな水が滾々と湧き出る日本名水百選・轟水源から船場橋のたもとにある井戸まで飲料水を引く轟泉水道の建設計画を立てました。

轟泉水道は、松橋焼の瓦質管を数千個、連結し、総延長4・8kmにもなる大工事です。今から約340年前、寛文3年（1663年）に完成しました。ところが、敷設から1

ついで、使用する馬門石の色を詳細に指示したり、高さ2m以上もある馬門石製の灯籠を自ら設計、蕉夢庵の庭に置いたりしていました。水道改修に対しても興文公の馬門石へのこだわりは相当なもので、馬門付近の石切場で一般的な灰黒色の石は一切使わず、全てピンク色の馬門石のみを使用しました。推定約7000本という大量の馬門石製の水道管が使用され、興文公の改修にかける情熱は計り知れないものがあります。



水道工事で出土した瓦質管と馬門石製の水道管  
(新小路町・教育委員会前)

全国に誇れる第一級の文化遺産なので、次回のお話は「馬門石製品のあれこれ」。

鎌倉から室町時代までは、主に墓石だけの利用でしたが、江戸時代になると大規模採掘が開始され、多種多様な製品が造られました。現在も現役で活躍するこれらの製品達に注目してみたいと思います。